

特集用・宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第51話

マッターホルンとアイガー北壁の初登頂 スイス

山岳関連の書物に夢中になった時代があった。今も記憶の底にあるのはスイスの名クライマー、ガストン・レヴィファの「星と嵐」（六つの北壁登行）であろうか。

読み耽るに従い書物から想像したり空想したりする段階から次第に欲張りになり、山をこの足で確かめてみたいと思うようになった。国内では南アなど幾日もかけて縦走を楽しみ、高じて海外へ出張するたびに所を変えスイスアルプスを眺めた。

とりわけ胸躍らせ読んだマッターホルンとアイガー北壁をこの目で確かめた時には、山に対し自然に畏敬の念が湧いてきた。同時にこんなところを人間がよく登れたものだという思いがした。

かつての今ほど登山用具が発達していない時代に、あの頂上に人が立ったなどとても信じられず、人間業とは思えないそういう気持ちになった。



早朝のマッターホルンとツェルマット



夕暮れの鬼気迫るマッターホルン

険しさや難度からアルプスの三大北壁と呼ばれているのは、マッターホルンの北壁、アイガー北壁、グランド・ジョラスの北壁であるが、出張の折週末を利用してマッターホルンとアイガーはこの目で確かめた。印象は衝撃的であった。写真では見慣れているが山容はやはり想像した通りの日の当たらない暗い垂直の壁だった。マッターホルンの基地は麓にあるツェルマットの町だ。天を衝く特



登山基地ツェルマットの町のメインストリート



登山電車でゴルナグラートへ

色ある尖頭が目に入り美しいシルエットを見ると誰しも自然に心臓が高鳴る。登山客やハイカーは無論世界中から多くの観光客が押し寄せ、メインストリートには小さいがこぎれいなホテル、土産物店やレストランが軒を連ね大変な賑わいである。ツェルマットは清浄な空気を保つために一切車の乗り入れが禁止されている歩行者天国でもある。

訪れた人はツェルマットから登山電車かケーブルカーあるいはリフトを使って展望の効く高みへ上がり、マッターホルンを身近に感じることになる。4478mの天を突きさすマッターホルンの



まじかで見えるマッターホルン

初登頂は1865年にイギリスの登山家エドワード・ウィンパー（1840年～1911年）によって成し遂げられた。ウィンパー以下総勢7名で挑戦したが下山途中で悲劇が起こる。一人が滑落し続く3名が引きずられ4名を支えるロープが切れて4名全員が墜死した。

ツェルマットのさして大きくない、こじんまりした山岳博物館にはその時の切れたロープが展示してある。こんな細いロープに4人が命を託していたとは・・・としばし眺めていたことを思い出す。ウィンパーは「アルプス登攀記・岩波文庫」を著している。なお1965年に服部満彦・渡部恒明がマッターホルン北壁を日本人初登頂し大いに話題になった。

一方クライマーの多くの命を奪ったアイガー北壁は、1800mの暗く不気味な印象を与える大岩壁である。初登頂は1938年ヘック・マイヤーのドイツチームとオーストリアのチーム計4名が協力して成し遂げた。日本人初登頂は1965年に高田光政によって成し遂げられた。



牧歌的な向こうにアイガー北壁が



多くの命を飲みこんだ昼なお暗い北壁

アイガーへはグリンデルワルドから登山電車に乗って牧歌的な中を走り高度を上げて行く。アイガー直下のクライネ・シャイデックで乗り換えて、アイガー北壁の岩壁内部に掘られたトンネルを走り、途中北壁に穴が二か所空いていてそこから下界が見渡せる。終点はユングフラウヨッホで氷河の中に駅がある。氷河を掘りぬいた通路を抜けて展望台に立つと目の下には有名なアレッチ氷河が延々と伸びている。この大岩壁の固い岩を掘り進み電車を頂上まで通すなど破天荒なアイデアを



思い付き実行したスイス人の技術と執念に脱帽した。

クライネ・シャイデックからの北壁